

展した。

青少年が大企業に集中したのみならず、野業の基幹労働力までも兼業に従事するようになった。売菜兼業農家も当然この大きな変動のなかにある。即ち、行商人の減少となって現われた。後継者不足、あるいは行商人の転向によって売菜兼業農家の転向が生じる。又、機械化に裏うちされて農業が年中行事可能になった為、売菜への兼業指向性が減ずる。

しかしながら、この減少傾向と町部から農村部への懸場帳の流れを考慮すれば、一方に於て、売菜兼業農家の固定化と行商の大規模化が考えられる。転向した売菜兼業農家というのは他を兼業した方がより高収入を得られる程度の行商規模の農家と思われるので、売菜兼業農家は比較的的行商規模の大きな農家に固定化していると考えた。即ち、戦前農村プロレタリアとして売菜兼業を開始し、売菜に全力を投下した小農家と、戦後農村ブルジョアとして大規模に開始した大農家に固定化していると推察した。大規模化は機械化に大きく裏うちされている。

行商という形態から当然交通系も成立発展の要因の1つとして考えられる。それは、江戸期においては北陸街道、明治に入ってから北陸本線沿いに出身が集中した事に示されている。

当地域には二者共存在したが、交通の発達により、大正期頃よりこの要因は消滅してしまったと考えられる。

---

## 調布市・府中市の都市的發展過程

— 犬 飼 浩 子 —

調布市・府中市の自然的背景としての特徴は、この二市が、地形的には多摩川に平行した地形面を形成する沖積低地・立川段丘・武蔵野段丘上に位置していること、地質的には砂礫層やローム層が卓越していること、地下水は扇状地性台地の武蔵野段丘上では深くに、周辺では浅く存在していることである。そしてこの地形、地質、水系は、人文的背景である歴史・集落に多大の影響を与え、各々の地形面における差がはっきりと出ている。つまり沖積低地は自然発生的散型集落地として、立川段丘上は自然発生的擬型集落地として、武蔵野段丘は計画的な新田集落として発達している。又、用水路についても野川・仙川・入間川その他、沖積低地面は多摩川から、台地では玉川上水からそれぞれ引水している。これらに見られるように、自然的背景と人文的背景は相互に関連し合っており、二市の地域的性格の基礎を成しているわけである。次に江戸時代以後の二市の發展過程を見ると、この頃から全国的な人口移動が激しくなり、それだけに交通路線が地域の發展に与える影響は大となる。まづ江戸時代に甲州街道筋が宿場として栄え、武蔵野新田集落の親村となった。明治時代になり、

市の北を中央線が通ると、甲州街道沿いは衰退傾向に入った。しかし間もなく下河原線の設置により府中に大工場が立地し、大正時代に入り京王線が敷かれると、又新しい発展を見せるようになった。この頃より東京自身の人口は急増し、関東大震災後に山手環状線外に伸びはじめた住宅化の進展により、電車もスピードを速め、通勤電車としての性格を持つようになってきた。又昭和初期に誘致された娯楽施設・工場等は、日本の産業の飛躍的発展の結果もたらされたもので、この期が二度二市にとって、都市施設整備期になったわけで、都市としての発展の基礎をつくった。戦後は疎開人口、産業回復とともに、二市の発展がもたらされたが、特に昭和30年以後には、東京都心との結びつきが緊密になり、東京を母市とする西郊住宅地として発展するようになった。これは東京への過度の人口集中、資本主義的経済の繁栄、都内の地価の高騰、電車のスピードアップにより、都内からの流入人口が激増した結果、小地主群が発生し、小規模な住宅が急増した。

こうして母市東京に依存する通勤住宅地としての変化を見せたわけで、又近年の大資本による団地・集団住宅地の増加はますますこの傾向を強めている。つまり30年以後の二市の発展は、それまでの二市を中心とした発展という性格が無くなり、東京の住宅衛星都市として大都市圏東京の中に完全にまきこまれており、東京西郊に位置する二市の地域の性格はここに特徴的な変化を遂げたことになる。そして現在における二市の都市構造は、交通・住宅・商工業ともに都市的発展を反映している。そしてすでに住宅都市としての当面の都市問題をかかえているが、複雑な問題がからみ、問題解決は容易でない。又都市計画は将来の予想にもとづく計画ではなく、悪化した現状に対する対策でしかない。しかし、地域の様相はそれらと共になお変化しつづけ、都市の複合化、高次の都市的発展へと続いていくであろうと思われる。

---

## 防府市における 干拓地の地理学的研究

---

小 倉 晃 子

調査地域は山口県の瀬戸内海周防灘沿岸地域のほぼ中央に位置している防府市にある干拓地である。

論文を要約すると次のようになる。

### 第一章 干拓地の築立と歴史的発達

藩の財政事情を直接の要因とした毛利藩の新田開発政策のもとに、水田・塩田の開発を目的として近世以降約280年の間に1,600haの干拓地が防府に於いて形成された。地形的には当時島